

# 平成19年度第1回四国ブロッククラブミーティング 2007 開催報告

日時:2007年6月23日(土) 10時~17時

会場:香川県立文書館

去る2007年6月23日に香川県立文書館にて、第1回四国ブロッククラブミーティングが開催された。四国ブロック内18の育成指定クラブの内、16クラブとその育成を支援する4県全てのクラブ育成アドバイザー、そして県体育協会事務担当者、地方企画班員が今回の会議に参加した。今回のクラブミーティングの目的は、「クラブ設立までの歩みとクラブづくりの進め方」に対する理解を深めることに力点を置いた。以下では、会議の様子について振り返る。

## シンポジウム「総合型クラブ設立に向けた活動について」

最初に、会議に参加した育成指定クラブがクラブ設立までの歩みを具体的にイメージできるように、シンポジウムを行った。新規クラブは、設立準備を進める上で、「いつ、何を、どのように行えばいいのか?」という手探りの状態であろうし、また2年目を迎えた継続クラブは、設立総会に向けて既存団体との連携や効果的な事業の展開、またクラブ運営に必要な資金調達といった自主運営に向けた展望についてアイデアやノウハウなど、「クラブマネジメントのいろは」を求めていると考えられたため、実例に基づいた具体的な内容を参加者に提供できるように努めることにした。また登壇してもらうクラブは、できる限り異なった設立母体、環境要因を持つクラブを選定することにした。なぜならば、クラブ関係者がシンポジストを「雲の上の存在」と感じるのではなく、自らのクラブと似たような境遇や状況であれば、身近に感じ、イメージしやすいと考えたためである。

そこで育成指定クラブから設立した高知県のスポーツクラブ会長青地三男氏、先進クラブの事例として地方企画班員であり、愛媛県しおみクラブクラブマネージャー能田雅雄氏、そして香川県クラブ育成アドバイザー大山晶子氏に登壇してもらい、さらに四国ブロックでは、独自に育成指定クラブで2年目を迎える継続クラブとして高知県佐川町さくらスポーツクラブ事務局長志手清晴氏にも登壇してもらい、育成指定クラブにメッセージを送ってもらうことにした。そして舵取り役のコーディネーターは、地方企画班員であり、NPO法人ELF丸亀理事長齋藤栄嗣氏が務めた。登壇した各クラブに対して、これまでの会議資料やクラブ設立までの歩みなど、これから育成指定クラブが積み上げていくと思われる事柄を、できる限り資料として提示してもらうようにした。



行政からの財政的支援を受けず、核となった体育指導委員や民間人のエネルギーによって設立されたいのスポーツクラブは、設立までの2年間のスケジュールが一覧になっており、どの部会が、いつ、何を、どの様な活動を行ったのかが記録されている。実際、会議を進める際にも「何を、いつまでに実施するか」というように、計画的な設立準備委員会の運営に努めたようである。特に、会議で様々な事柄を決定する際に、設立準備委員会全体では、物事が前に進まなかったことが、部会制を導入したことにより、委員の役割や自覚が促され、人任せのクラブ運営にならずに、現在でもこの部会が運営面で機能しているということであった。苦勞することとしては、これまでの地域のスポーツ振

興を担ってきた体育会（地区体協）とのかねあいによって、活動場所などがうまく確保できないことや、町が総合型クラブに対する理解が低いと、ほとんど支援を受けていないということなどがあげられていた。ただ、高知県で進める様々な補助事業を獲得し、資金調達に努めたり、また近隣の総合型クラブとの交流やタイアップを図り、クラブマネジメントに関する情報収集にも努めたりしているということであった。

行政と体育指導委員が連携を図り、総合型クラブの設立に向けて公民館と地区体協、社会福祉協議会や既存スポーツ団体とが協議を重ねて、合意形成を図りながら、設立されたのがしおみクラブである。まず、クラブ設立の準備を進めるにあたって、「地域に元気を！地区民に健康増進を！」という基本理念を定め、その理念のもとに成人、ジュニア、高齢者・障がい者のスポーツ振興を図っていくための長期的計画を策定したということである。目玉となるスポーツ教室には、既存のスポーツ活動ではなく、ニュースポーツやボクササイズ、また伝統芸能、さらには、「泳げない子どものための水泳教室」などを事業化し、多くの参加者を得たということであった。ただ、クラブの事業化に際しては、研修会を充実させて、人材の養成には特に力点を置かなければならないと感じたようであった。また地域のニーズを定期的に把握するために、アンケート調査を実施していたが、ユニークなアイデアとして、地域住民のニーズを把握するためだけに調査を実施するのではなく、クラブのパンフレットや教室スケジュールなどを同封し、クラブの認知度を向上させるための広報活動として調査を活用したということであった。地域のニーズを的確に把握し、「間口は広く、敷居は低く」というモットーのもとに、組織・人・心をつなぐ努力と新たな担い手となる人材の養成に力を注ぎたいということであった。

体育会と少年スポーツ活動の団体とタイアップし、クラブ設立をめざす佐川町さくらスポーツクラブは、計画的に会議を進め、スポーツ教室や大会、またイベントなどの開催だけでなく、視察や研修会への参加・開催を重ねて、組織力をアップさせてきたクラブである。資料は、詳細に記録・保存され、高知県内の自治体やクラブが視察にも訪れるようなモデルクラブである。このクラブにあえて発表してもらったのは、計画的に物事を進めることによって、クラブ設立までの見通しや設立後のクラブのビジョンは現時点でも十分描けるということを育成指定クラブに理解してもらいたかったためである。このクラブは、設立までの準備とともに、NPO 法人の取得や指定管理者に関する研究を進め、財源確保のための手だても講じるということであった。



香川県クラブ育成アドバイザーの大山氏は、育成指定クラブに対して、広域スポーツセンターやクラブ育成アドバイザーを有効活用することを進めると同時に、自身、こまめにクラブに足を運び、クラブとの良好な関係を構築するように努めているということであった。また多くのクラブが抱える問題は共通する点が多いため、育成指定クラブ間や各地域で連携を図り

合うことの重要性を示唆した。

コーディネーターの齋藤氏は、クラブ育成の鍵を握るのは、「人」であり、発掘や確保に留まることなく、次世代の担い手を育てるための投資をいま行い、クラブが歴史を積み重ねるために必要な伝達・継承、そしてバトンタッチのための準備をすることが重要であると述べた。

## グループディスカッション・全体会

クラブの理念・目的・設立過程、 人材の確保と既存団体等との連携、 クラブの事業と財源

の確保といった3つのテーマに分かれて、グループディスカッションを行った。このディスカッションでは、「話してスッキリ！」に留まらず、何を考え、何を解決しなければならないのか、また何が解決し、何が解決できなかったのかを明確にし、クラブマネジメントの「確かな手応え」を参加者に感じてもらうことに力点を注いだ。



第1のテーマでは、受益者負担意識をどのように高めるか、また既存団体、特に地区体協との連携をどのように図るか、さらには、ボランティアや運営委員の確保をどのように進めるかという点について議論された。ユニークな事例として、しおみクラブが地域住民へのニーズ調査を実施した際に、調査票にボランティアの募集を呼びかけたところ、配票数の約1%がそれに応じたということであった。

第2のテーマでは、既存団体との連携とクラブ経営に必要な資源、特に場所の確保をどのようにするかという点が議論された。特に施設の既得権については、施設開放委員会や利用者調整会議



に参画し、既存団体との対話と相互理解の必要性などがフロアから提案された。

第3のテーマでは、財源確保、講師への謝金の設定、また会費の設定について議論された。財源確保については、行政施策の変化に敏感になることやニーズのある事業を展開することなどが具体事例として取り上げられた。ただ、事業展開は、他地域の模倣だけでは、自地域で成功するとは限らないため、地

域のニーズを十分把握することが重要であることが意見として述べられた。また会費の設定に関しては、「これくらい...」という希望的な観測ではなく、収支のバランスを考慮するとともに、事務局経費としての年会費と事業参加料を使い分けることによって財源確保や受益者負担意識を高めることが可能になるのではという提案がなされた。

## 会議を終えて...

参加者は、熱心に討議を繰り広げたが、やや気になる声も聞かれた。中国・四国地区から四国ブロックとして独立し、4県の移動は比較的容易になったはずだが、参加者から「このような会議に1日を費やすのはクラブにとって負担であり、ネット配信などにして会場までいなくてもいいようにしてほしい」という意見が寄せられた。このクラブミーティングは、育成指定クラブにとって意味ある会議となるために、事前に中央企画班、地方企画班員による会議を重ね、当日に至っている。その労力を考慮しろというつもりは毛頭ないが、安直に情報を得られるという発想を持たずに、自らがフィールドに赴き、情報やネットワークを自分の足で獲得するという意欲を抱いてほしい。ネットで我々は多くのものを得ているが、そのようなツールが有効に機能するのは、その根源にある人間と人間との信頼関係の貯蓄による賜物であるということをおぼろげに我々は決して忘れてはならない。ただ、この企画を進める我々が、参加者にとって意味ある会議を企画するということに対して、鋭意努力することも当然、忘れてはならない。

(報告)四国ブロック地方企画班長 長積 仁)